

新入社員の「コロナ禍における就職活動等」に関する意識調査

調査結果のポイント

- オンライン就活の経験者は全体の3割。大卒では半数以上が経験。
- オンライン面接では、約6割が意思疎通や質問のタイミングに苦戦。
- コロナ禍収束後真っ先にやりたいことは、「海外旅行」がトップ。
- コロナ禍の生活では、「一人時間を楽しんだ」が6割。
- 人間関係の変化として、半数が交友関係の狭まりや人とのつながりの希薄化を実感。
- コロナ禍の生活を通して、「一生に一度のイベントまで自粛しないでほしい」と感じた割合は4割超。

調査要綱

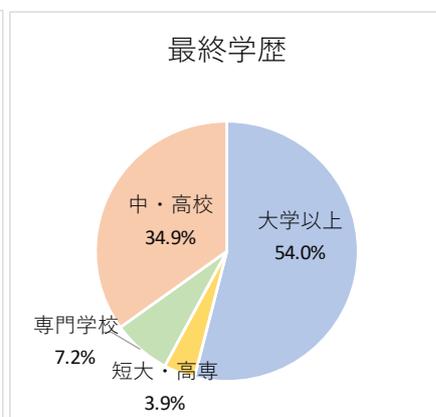
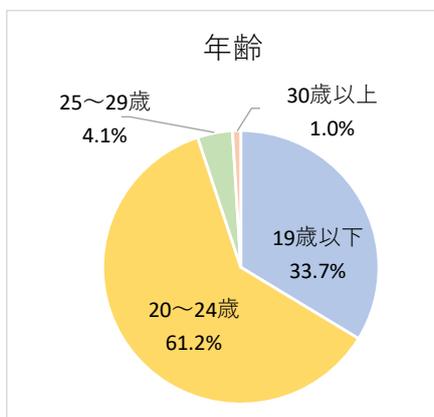
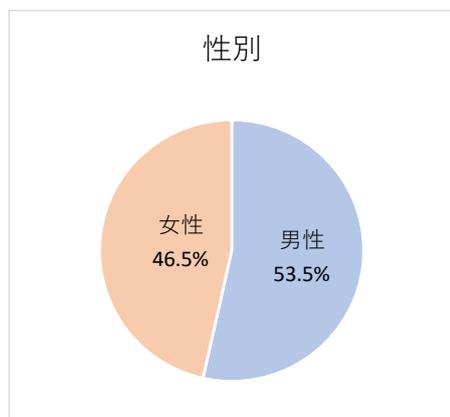
1. 調査対象： 当社主催「じゅうろく新入社員セミナー」を受講した、岐阜・愛知両県内企業の新入社員
2. 調査時期： 2021年4月
3. 調査方法： 無記名式アンケート
4. 有効回答者数： 415名（内訳は下表のとおり）

（注）本文中の図表の計数は、四捨五入の関係で内訳の合計等が合致しない場合がある。また、無回答等により合計が合致しない場合がある。

回答者の内訳

年齢	男性		女性		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
19歳以下	76	34.2%	64	33.2%	140	33.7%
20～24歳	136	61.3%	118	61.1%	254	61.2%
25～29歳	7	3.2%	10	5.2%	17	4.1%
30歳以上	3	1.4%	1	0.5%	4	1.0%
合計	222	100.0%	193	100.0%	415	100.0%

最終学歴	男性		女性		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
大学以上	125	56.3%	99	51.3%	224	54.0%
短大・高専	3	1.4%	13	6.7%	16	3.9%
専門学校	17	7.7%	13	6.7%	30	7.2%
中・高校	77	34.7%	68	35.2%	145	34.9%
合計	222	100.0%	193	100.0%	415	100.0%



1. 調査の目的

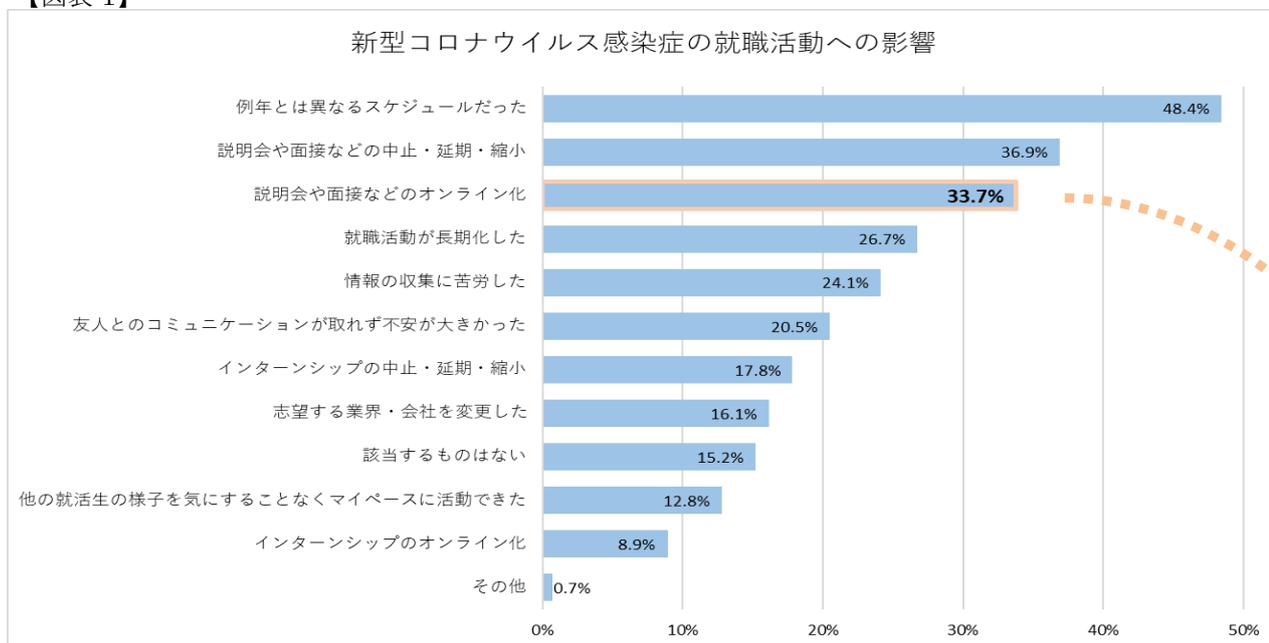
2021年度の新入社員は、新型コロナウイルス感染症拡大（以下、コロナ禍という）の只中に就職活動を行うことを余儀なくされ、また、多くが学生生活最後の年をコロナ禍の中で過ごすなど、人生の節目といえる時期に前例のない経験をしている。

当社では、今年4月に行った「新入社員の意識調査アンケート」に、コロナ禍で経験したことについて質問を設定し、従来とは異なる経験をした新入社員のコロナ禍における意識について、就職活動を中心に探った。

2. コロナ禍によって就職活動にどのような影響があったか

オンライン就活の経験者は全体の3割

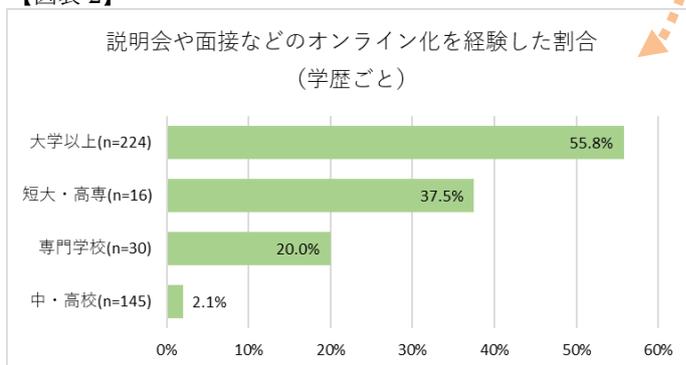
【図表 1】



コロナ禍によって就職活動にどのような影響があったかを複数回答で尋ねた。

最も割合が高かったのは「例年とは異なるスケジュールだった」で48.4%、次に「説明会や面接などの中止・延期・縮小」で36.9%であった【図表 1】。就活スケジュールの変更に伴い「就職活動が長期化した」と回答した割合も26.7%あった。一方、コロナ禍では新卒採用を例年より縮小する業種もあったようだが、「志望する業界・会社を変更した」と回答した割合は16.1%にとどまった。

【図表 2】



コロナ禍での就職活動においては、オンライン就活が注目を集めた。「説明会や面接などのオンライン化」を経験した割合は33.7%、「インターンシップ

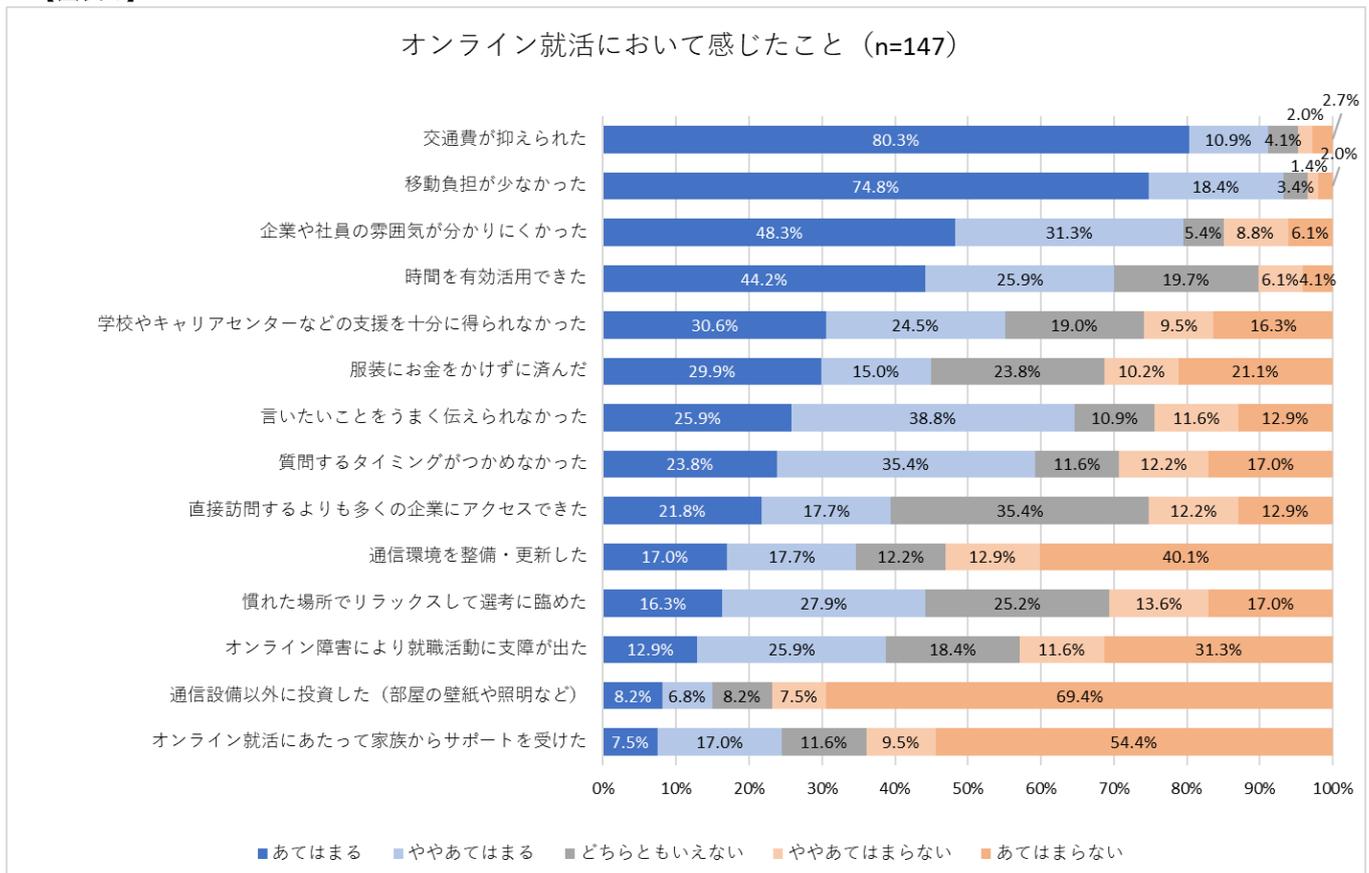
のオンライン化」を経験した割合は8.9%であった。このうち、「説明会や面接などのオンライン化」を経験した割合を最終学歴ごとにみると、中・高校では2.1%であったのに対し、大学以上では55.8%と最終学歴によって大きな差があった【図表2】。高卒採

用では、企業が学校を通じて求人情報を提供し、1人1社の応募形式をとるのに対して、大卒の就活では大規模な説明会や集団面接などを利用することが多い。それぞれの就職活動における感染リスクの違いなどから、企業側の対応も異なっていたようだ。

3. オンライン就活において感じたこと

移動負担は軽減されたが、企業理解や面接で苦戦も

【図表3】



前段の「2. コロナ禍によって就職活動にどのような影響があったか」で「インターンシップのオンライン化」もしくは「説明会や面接などのオンライン化」と回答した人(オンライン就活を経験した人)に対して、オンライン就活を経験してみて感じたことを尋ねた。

メリットとしては、「移動負担が少なかった」と回答した割合が93.2%（「あてはまる」＋「ややあてはまる」、以下同様）であった【図表3】。次いで「交

通費が抑えられた(91.2%)」、「時間を有効活用できた(70.1%)」などの回答が上位であった。

デメリットとしては、「企業や社員の雰囲気が分かりにくかった(79.6%)」、「言いたいことをうまく伝えられなかった(64.6%)」、「質問するタイミングがつかめなかった(59.2%)」などがあった。また、「学校やキャリアセンターなどの支援を十分に得られなかった」という回答が半数を超えたことや「オンライン就活にあたって家族からサポートを受けた」に

あてはまらないと回答した割合が6割を超えたことなどから、周囲のサポートを十分に得られず手探りのまま選考に臨んだ就活生も多かったとみられる。

自由意見として、「突然の変化にも柔軟に対応する能力はこの先も求められる機会があると思うのでよい経験になった」と前向きに捉えるコメントもあった。また、「例年になく苦しい局面でも乗り切れる企業かどうか判断しやすい年だった」というコメント

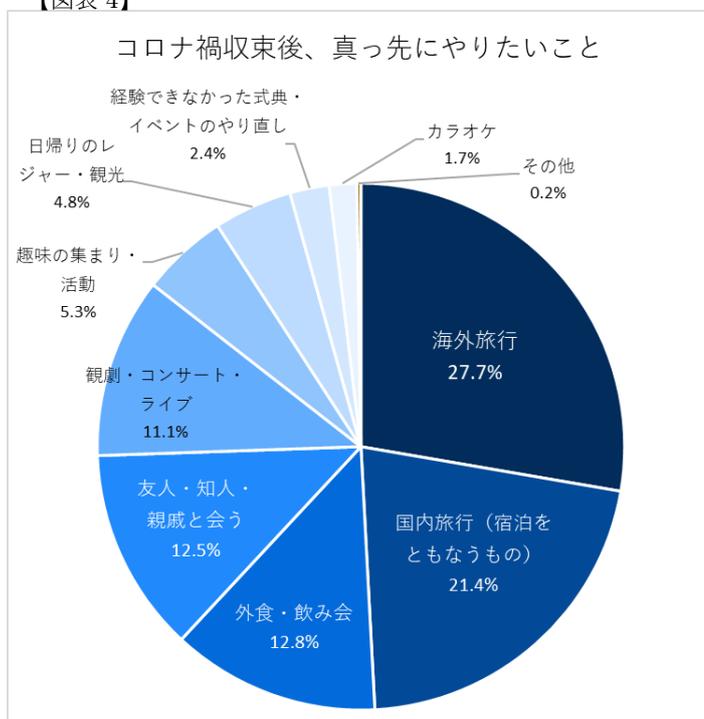
もあり、コロナ禍という前例のない事態への対応を通じて企業側もまた評価される立場にあったと言える。

オンライン就活にあたっては、「通信環境を整備した」、「通信設備以外に投資した（部屋の壁紙や照明など）」と回答した割合は、それぞれ34.7%、15.0%であった。

4. コロナ禍が収束したら真っ先にやりたいこと

やりたいこと1位は海外旅行

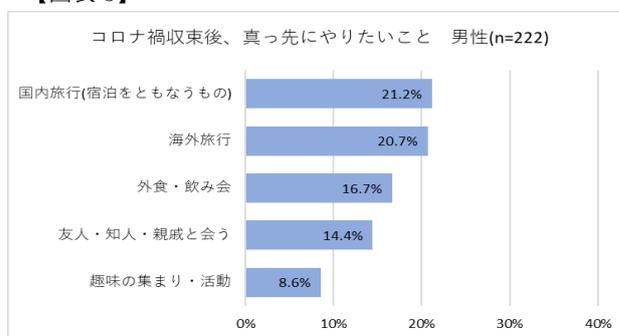
【図表4】



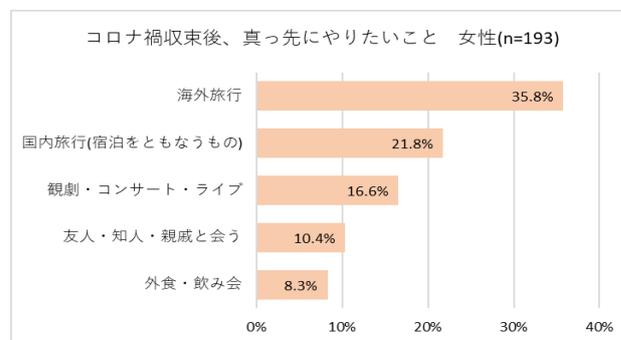
コロナ禍が収束したら真っ先にやりたいことは何かを尋ねた。

1位は「海外旅行(27.7%)」、2位は「国内旅行(宿泊をとまなうもの)(21.4%)」であり、合わせると約半数に上った【図表4】。本年度の新入社員は卒業旅行などへ行く機会を失った人が多く、コロナ禍収束後に旅行へ行くことへの期待は大きいとみられる。3位は「外食・飲み会」で12.8%であった。

【図表5】



【図表6】

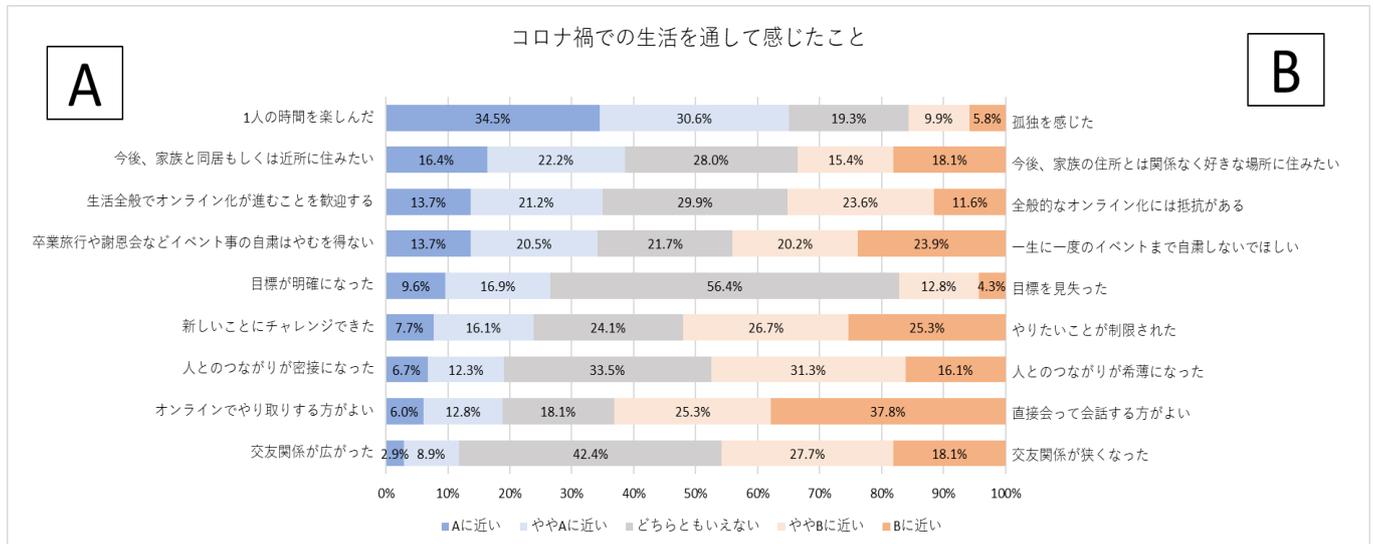


男女別にみると、男性は1位が「国内旅行(宿泊をとまなうもの)(21.2%)」、2位が「海外旅行(20.7%)」であったのに対して、女性は1位が「海外旅行(35.8%)」、2位が「国内旅行(宿泊をとまなうもの)(21.8%)」であった【図表5】【図表6】。その他に、男性では「趣味の集まり・活動(8.6%)」が上位に入っていたのに対して、女性は「観劇・コンサート・ライブ(16.6%)」が上位に入っていた。

5. コロナ禍の生活を通して感じたこと

交友関係は狭くなり、人とのつながりは希薄に

【図表 7】



コロナ禍での生活を通して感じたことや自分自身の現状についてあてはまることを尋ねた。

自分自身の過ごし方や時間の使い方の面では、「1人の時間を楽しんだ」と回答した割合が高く、65.1%（「Aに近い」＋「ややAに近い」、以下同様）であった【図表 7】。反対に「孤独を感じた」とする回答は 15.7%と少数派であった。コロナ禍の生活でも意欲的に過ごした人は一定数いたようで「目標が明確になった」と回答した割合が 26.5%あり、「目標を見失った（17.1%）」を上回った。ただ、半数以上は「やりたいことが制限された（52.0%）」と感じており、「新しいことにチャレンジできた」と回答した割合は 23.9%であった。コロナ禍では、自分のやりたいことや新しいチャレンジのために、実際に行動を起こすのは難しかったようだが、自分自身を見つめ直す期間として過ごした人もおり、現状を悲観した過ごし方ばかりではなかったようだ。なお、「目標が明確になった」および「新しいことにチャレンジできた」と回答した割合は男女差が大きく、「目標が明確になった」は男性が 32.9%であったのに対して、女性では 19.2%、「新しいことにチャレンジできた」

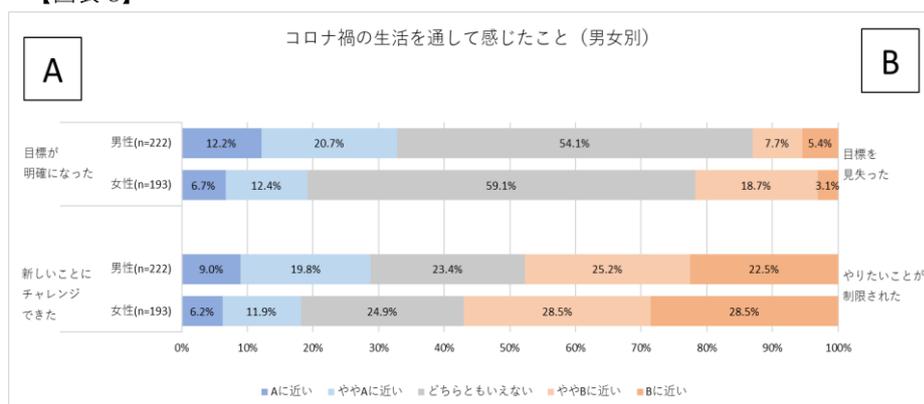
は男性が 28.8%であったのに対して、女性では 18.1%であった【図表 8】。意欲的に過ごしたのは男性の方が多かったようだ。

人とのつながりやコミュニケーションの面では、「人とのつながりが密接になった（19.0%）」とする回答よりも「人とのつながりが希薄になった（47.5%）」と回答した割合の方が高かった。また、「交友関係が広がった（11.8%）」と回答した割合よりも「交友関係が狭くなった（45.8%）」と回答した割合の方が高かった。オンラインと対面のコミュニケーションとを比較すると、「オンラインでやり取りする方がよい」が 18.8%、「直接会って会話する方がよい」が 63.1%であった。

インターネットや SNS が身近にあり、ソーシャル・ネイティブなどとも呼ばれる世代だが、生活全般でオンライン化が進むことについては手放しで賛成しているわけではない。「生活全般でオンライン化が進むことを歓迎する」「オンライン推進派」と「全般的なオンライン化には抵抗がある」「オンライン慎重派」はそれぞれ 34.9%、35.2%と拮抗している。

【図表 8】

今年度の新入社員は、学生時代のイベントや節目の行事などでも自粛を余儀なくされたが、「卒業旅行や謝恩会などイベント事の自粛はやむを得ない」とする回答が 34.2%、「一生に一度のイベントまで自粛しないで欲しい」とする回答が 44.1%であった。



6. 総括

コロナ禍での就職活動において急激に広まったオンラインでの選考は、移動負担の軽減などの利点がある一方で、企業への理解を深める過程や面接での意思疎通の点で就活生側に不満や後悔がみられた。企業側にとっても、オンラインで受ける印象と対面で感じられる人物像との間で乖離が生じることは否定できない。就活生・企業双方のミスマッチを防ぐためにも、選考の最初の段階はオンラインを利用し最終面接は対面で行うなど、オンラインと対面との併用が有用であろう。

コロナ禍における孤独・孤立とその支援については、政府も対策室を設けるなど重要性が指摘されてきたが、本調査では孤独を感じたと回答したのは少数派であった。休校措置や外出の制限などで巣ごもりを余儀なくされてはいたが、インターネットを身近に感じて育ってきた世代にとっては、SNS やビデ

オ通話システムなどの利用に慣れることはたやすく、外出制限の期間中も何らかのつながりを持つことは容易であったと推察される。ただ、やはり直接会って会話の方がよいという意見が多数派であった。また、生活全般のオンライン化についても“推進派”と“慎重派”の割合は同程度あり、オンライン一辺倒ではない様子が見て取れた。

コロナ禍が収束したらやりたいこととして約半数が旅行願望を持っており、潜在的な旅行需要があるとみられるが、社会人になると学生の時ほど自由になる時間はなくなる。コロナ禍の影響で学生時代を楽しめなかった世代に向けて“学生時代やり直し休暇”のようなものが設けられても良いかも知れない。

(研究員 萩原 綾子)